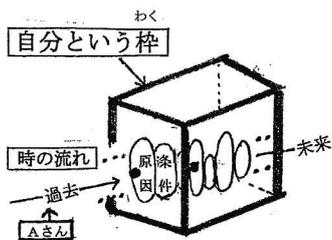


釈迦(ブツダ)の空

(釈迦: BC463~BC383)



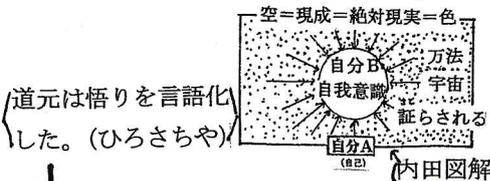
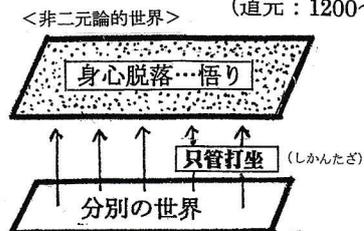
■自分という枠はあるが、自分というものは原因・条件(縁起)で生成・消滅を繰り返すので、本質(実体)は問えない(ない)。

■「空」とは、あるものにある性質が欠けている…固定的な実体がない。

■「空」とは、形(枠)はあるが本質はない。

道元の悟り

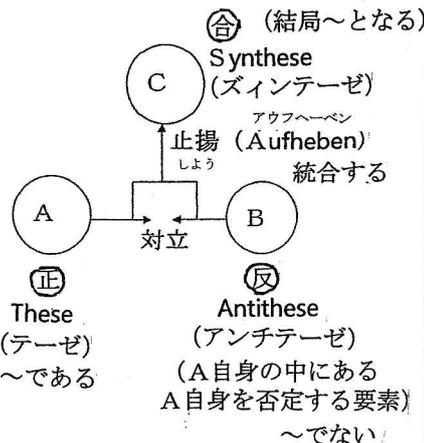
(道元: 1200~1253)



正法眼蔵:「仏道をならふというは…身心をして脱落せしむるなり」→仏道を学ぶ事は、自己を学ぶ事。自己を学ぶ事は、自己を忘れる事。自己を忘れる事は、万法(全ての存在)によって証(さと)らされる事。万法に証(さと)らされるとは、身心脱落…自己・他己の意識や執着心等がなくなる事…である。

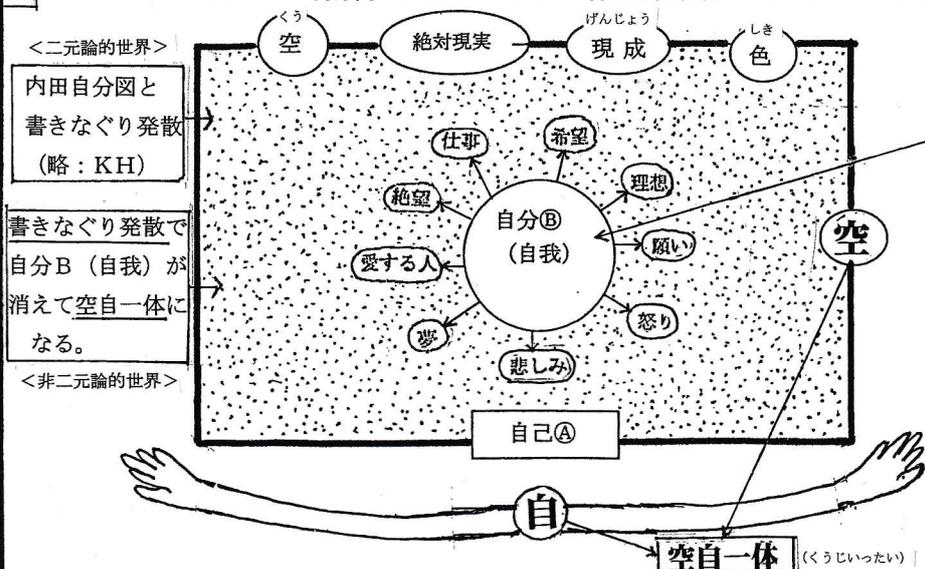
ヘーゲルの弁証法

(Hegel: ドイツ: 1770~1831)



禅の悟りは弁証法とは異なる(鈴木大拙)。

2 ☆自己と自我の関係を示す自分図で、頭に浮かぶ全てを書きなぐり発散し、頭を空っぽにする。



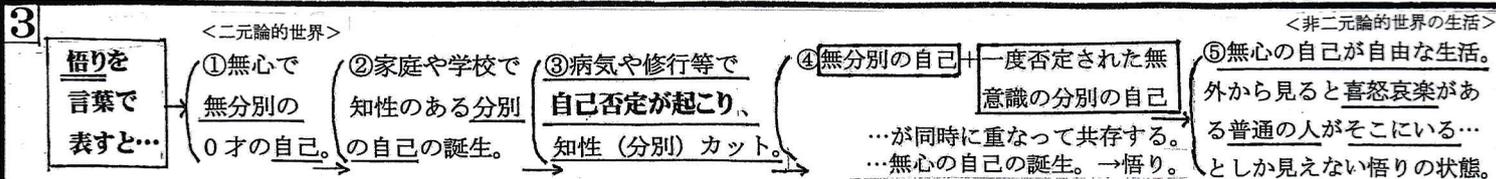
2009・4・8 内田自分図 (selfmap) で、悟りを図式化 (図解) した。

自分Bを指で隠すと?

- 悟りが実感! <非二元論的世界>
- 有るけど無い(色→空)。
- 無いけど有る(空→色)。
- 自分B(自我)が気にならない。
- 自由な生活が可能になる。

☆自己Aは無分別の自己、自分Bは分別の自己 > と考えられる。

☆実際は、「空自一体」の自覚はない(空っぽ)! ☆自分図は、自分を客観的に見るのに役立ちます。



4 <補足>...①~④の出典: 現代日本思想体系8 (絶版)・鈴木大拙、②西田幾多郎『善の研究』への序文。

- ①禅の悟りは心理学的にいうと、無意識を意識すること。
- ②西田の絶対無の哲学、言いかえると絶対矛盾の自己同一という彼の論理は、思うに、いささか禅体験に通じていなければ理解しがたいであろう。…彼は禅を西洋に理解させることを自己の使命と考えた。…西洋は知性に訴えて二元論的世界から出発するが、東洋は空の大地をしっかりと踏みしめる。
- ③エクハルトは「突破(とっば)」ということを用いる。これは明らかに悟りに該当する。…今まで連続していたものが、突如として断絶する様子である。非連続の連続、無分別の分別の体験に外ならぬ。
- ④…悟りでは無分別をみる、しかもその無分別のうちに分別を容れる。分別が無分別と別にならずして、一つになる。ここに悟りの妙がある。悟りの論理が建立せられる。
- ⑤無心の自己が自由な生活をするのが、禅の悟りの理想的な生活だ。(福島慶道・臨濟宗僧侶)